

# 第25回 ICOM (国際博物館会議) 京都大会 開催結果報告

## 1 開催概要

- (1) 会議名 : (和文) 第25回 ICOM (国際博物館会議) 京都大会  
(英文) ICOM Kyoto 2019, 25<sup>th</sup> ICOM General Conference
- (2) 報告者 : 第25回 ICOM (国際博物館会議) 京都大会組織委員会委員長 佐々木丞平
- (3) 主催 : ICOM (国際博物館会議)、ICOM 日本委員会、ICOM 京都大会2019  
組織委員会、日本博物館協会、日本学術会議
- (4) 開催期間 : 2019年9月1日(日)～9月7日(土)
- (5) 開催場所 : 国立京都国際会館(京都府京都市)ほか
- (6) 参加状況 : 120か国/地域・4,590人(国外2,724人、国内1,866人)

## 2 会議結果概要

- (1) 会議の背景(歴史)、日本開催の経緯 :

国際博物館会議 (ICOM) 大会は、国際博物館会議 (International Council of Museums、略称 ICOM) が1948年以降3年ごとに開催する博物館・文化財保護分野で最も歴史のある国際会議である。

すでに韓国と中国で開催実績のある大会を日本で開催することは、日本の博物館の重要な課題である国際化のみならず、日本文化の海外に向けた発信の観点からも大きな意義があることから、招致活動を展開し、2017年7月に開催された第24回 ICOM ミラノ大会において、第25回 ICOM 京都大会を2019年9月に日本で開催することが決定された。

- (2) 会議開催の意義・成果 :

大会史上最大の120の国と地域・4,590名の博物館関係者が参加し、全体会議や30の国際委員会で博物館をめぐる諸課題について発表・意見交換するとともに、全国各地で博物館等を訪問し日本文化に親しんだ。アジア文化重視をうたった大会決議の採択、防災委員会の発足など、日本が今後国際的に指導的な役割を果たすべき分野で成果が得られたほか、日本の多くの博物館関係者が、国際会議の企画・運営に主体的に参画する経験を積むとともに国際的ネットワークを構築するなど、今後の更なる国際化の進展の基盤が築かれた。

- (3) 当会議における主な議題 (テーマ) :

文化をつなぐミュージアムー伝統を未来へー

- (4) 当会議の主な成果(結果)、日本が果たした役割 :

大会史上最大の参加者を集め、日本の博物館の国際的認知度向上を図るとともに、国内の博物館関係者が1,866名参加し、本会議のほか、各地の博物館の協力を得て並行して開催された国際委員会の企画・運営でも主導的な役割を果たした。また、京都市および各地で実施された文化事業において、参加者は日本の文化に身近に触れ、地元コミュニティとの交流も活発に行われた。会期中に日本から13名が国際委員会等の役員に選ばれ、今後、国際的に指導的役割を果たすことが期待される。

また、アジア美術をテーマした全体会議を実施したほか、アジア文化の重要性に関する大会決議が採択されるなど、日本を含むアジアの文化・博物館の再認識を喚起したほか、新設された防災委員会では日本がその知見を活かし中心的役割を担う。

- (5) 次回会議への動き：  
本大会で採決を予定していた「博物館の定義」については、多様な意見が出され、採決に至らず引き続き議論されることとなった。次回は2022年にプラハ（チェコ）で開催される。テーマは“Power of Museums”で、サブテーマは検討中である。
- (6) 当会議開催中の模様：添付「第25回 ICOM（国際博物館会議）京都大会2019」参照
- (7) その他特筆すべき事項：ICOM 会員のみでの大会ではなく、研究者や学生の参加者、一般/学生ボランティア、各地での文化プログラムに関わった地域コミュニティなどにも、博物館について再認識する機会を提供し、マスコミでも全国レベルで報道され、広く関心を集めた。

### 3 市民公開講座結果概要

#### <舞鶴ミーティング>

- (1) 開催日時：2018. 9. 30
- (2) 開催場所：舞鶴市商工観光センター（国際会議場）ほか
- (3) 主なテーマ、サブテーマ：文化をつなぐミュージアムと文化遺産
- (4) 参加者数、参加者の構成：約120名（海外：25、国内ICOM会員40、一般55）
- (5) 開催の意義：ICOM 京都大会のテーマである「Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition（「文化をつなぐミュージアムー伝統を未来へ）」を深掘りするために、ICOM 会長ほか ICOM 本部役員も参加して、当該テーマに関する考察や研究発表、事例発表を行う国際会議を一般公開で開催した。
- (6) 社会に対する還元効果とその成果：京都府下で開催し、京都市以外での大会への関心を喚起した。
- (7) その他：大会1年前であり、各国のICOM 役員等の大会会場視察を事後に実施した。

#### <大会記念シンポジウム>

- (1) 開催日時：2019年5月26日
- (2) 開催場所：京都国立博物館
- (3) 主なテーマ、サブテーマ：文化をつなぐミュージアムー伝統を未来へ
- (4) 参加者数、参加者の構成：約100名（国内ICOM 会員30、一般70）
- (5) 開催の意義：大会を前に、ICOM 本部役員も参加し、新しい「博物館の定義」をはじめとした大会で取り上げられる課題、および大会テーマについて講演とディスカッションを行い、議論を深めた。
- (6) 社会に対する還元効果とその成果：大会で議論される博物館をめぐる現在および将来の課題について発表・議論し、大会の開催意義についての認識を広めた。
- (7) その他：大会が ICOM 会員のみではなく、多くの博物館関係者および社会にとって意義あるものであることを訴える機会となった。

#### <大会記念シンポジウム>

- (1) 開催日時：2020年2月11日
- (2) 開催場所：京都国立博物館
- (3) 主なテーマ、サブテーマ：日本にミュージアムの未来
- (4) 参加者数、参加者の構成：183名（ICOM 会員40、一般143）
- (5) 開催の意義：大会を振り返るとともに、その成果を日本の博物館の将来にどう活かすかを議論した。
- (6) 社会に対する還元効果とその成果：主要課題に関する議論、専門委員会等その他のプログラムの報告がなされ、日本の博物館の将来に向けた大会の意義を総括した。
- (7) その他：大会の報告だけではなく、成果を今後の日本の博物館の発展に活かすことの重要性を再認識する機会となった。

その他、「国際博物館の日」に因んだ諸事業や、京都府・市の博物館において多くの関連イベントを開催した。

## 4 日本学術会議との共同主催の意義・成果

### (1) 学術会議としてのプログラムの充実・深化：

ICOM（国際博物館会議）京都大会は、ICOM の 3 年に一度の会長以下役員の改選等、節目となる重要な全体会議であるとともに、例年は世界各地で別々に開催されている 30 の国際委員会メンバーが、大会開催地に集結し、全体のセッションと連携しながら、博物館を取り巻く国際的課題の議論を深める重要な学術会議でもある。

こうした性格の会議に臨むに際し、組織委員会は運営委員会の下に学術チームを設置し、大会テーマに即したプログラム展開を充実したものとすべく検討を行った。この学術チームの構成メンバーは、博物館学の専門家や有識者等から構成したが、共同主催者である日本学術会議からも、平成 29 年 7 月に同会議の史学委員会 博物館・美術館の組織運営に関する分科会が発出した提言「21 世紀の博物館・美術館のあるべき姿 ―博物館法の改正へ向けて」の作成に中心的に携わった識者に複数参画いただき、大会の全体セッションの構成や、プログラム構成について有用な助言を得ることができたのは、同会議と共同主催した大きな意義であり、具体の成果も残すことができた。

### (2) 日本で開催する京都大会を特徴づける新たな視点を反映した大会決議の提案：

ICOM 大会は、その大会テーマを基本として、大会後に ICOM および世界の博物館界が取り組むべきテーマを大会決議として採択する。この大会決議に、いかに開催国としての想いを込めた、しかも博物館に関する国際的視野を踏まえたものとして認められる項目を提案するためには、慎重な検討が必要で、この点についても、日本学術会議との共同主催に基づく連携の中で、学術チームの検討も大きな支えとなった。

結果的にも、各国内・国際委員会等から提案された 10 本の決議提案に対し、最終的に 6 本が決議案として ICOM 総会に諮られ採択されたが、その内の 2 本が日本委員会から提案したものであった。1 本は、従来欧米中心であった ICOM の組織でのアジア地域の重要性を主張した「The Integration of Asia into the ICOM Community (アジア地域の ICOM コミュニティへの融合)」であり、もう 1 本は、大会テーマの核である「文化をつなぐミュージアム」の理念を継続的に広く理解し博物館活動に活かすべきことを主張した「Commitment to the Concept of 'Museums as Cultural Hubs' (「Museums as Cultural Hub」の理念の徹底)」であった。このように、大会決議に開催国としての主張を反映できたことも日本学術会議と共同主催という連携の下に進めた成果の表れであったと言える。

### (3) 今後の我が国の博物館制度の見直しに向けた検討の促進：

今回の ICOM 京都大会における重要な採択事項とされていたのが、ICOM 規定の改正に伴う「博物館定義の見直し」であったが、新たに提示された新定義が、従来の定義から大きく変わる内容を含む案であったために、多くの国内委員会や国際委員会等から、より時間を掛けた議論が必要であるという意見が出され、当初予定の採決は行われず、博物館の新定義の採択は持ち越しとなった。

我が国においても、現行博物館法の改正とともに、変化する博物館政策の下に、今後の博物館制度の見直しは喫緊の課題とされ、ICOM 大会での定義見直しにも注目してきた。しかし、今回大会の議論を共同主催者である日本学術会議からの参加メンバーとも共有できたことは、採択延期という結果を踏まえ、今後の見直しを進める上で有用な議論を進め、深めるためにも大きな成果であったと考える。